

国立西洋美術館の家族プログラムの意義に関する一考察 —「どうびじゅつ」の分析から

阿部祐子

1. はじめに

今日、内外の多くの美術館でファミリー・プログラムが実施されており、国立西洋美術館もそうした美術館の一つである。しかしファミリー・プログラムの研究は極めて乏しく、我が国でも大高の先行研究^[1]を除いてほとんど見られない。とりわけ美術館訪問から一定期間を置いた後のプログラム参加者に対する追跡調査は稀少である。フォークとデアーキングは、博物館体験とは、人が博物館に行こうと思い立ったときから実際の訪問時、さらにはその経験がその人の記憶として残るようになるまでの、長い時間の流れの中で捉え得るものであるとしている^[2]。筆者は、プログラム参加という一度あるいは数回の美術館体験が、その後、参加者の家族にどのように作用しているのかを知るために、2012年3月～5月に国立西洋美術館（以下西洋美術館）で実施されたファミリー・プログラム「どうびじゅつ」に参加した家族に、約5年が経過した時点で電話によるインタビュー調査を行った。得られたデータの分析から家族にとっての美術館体験の意味を探り、西洋美術館におけるファミリー・プログラムの意義をめぐる考察を試みたい。本稿が美術館における家族プログラム研究の一助となり、美術館で教育に携わる人々にとり何らかの示唆となれば幸いである。

2. 先行研究

(1) ミュージアムにおける来館者の追跡調査

博物館体験の長期的作用に関する調査は、対象や手法、時間の間隔はさまざままでこそあれ事例が散見される^[3]。みのかも文化の森・美濃加茂市民ミュージアムでは、開館当初から市内の全小学校と連携し、小学1年生から6年生までの児童に毎年「みのかも文化の森」での体験学習を行っているが、その6年間の学びが彼らの進路、生活、生き方になんらかの影響を与えているのかを知るために、2013年度から2015年度までの3年間、成人式を利用して市内の20歳の人々にアンケート調査を実施した^[4]。美術館でもこうした長期的作用に関する調査を進めていく必要性を感じる。

(2) 家族における教育

家族は社会においてもっとも基本的な共同体である。レヒターは、幸福、暴力、愛、思いやり、誠実さ、偽ること、私有すること、共有すること、権力を操ること、状況を話して同意を得ること等はすべて家族の中で見られることであり、家族という環境は、実際、あらゆる経験をする場であるとしている^[5]。スミスが「われわれは家族の態度、気風、その先入観まで自分のものに」すると述べ家庭を主な教育者と考えたように^[6]、子どもは、親の信念やものの考え方、他者

や世界に対する姿勢から多くを得て自分自身のものにしていく。西洋美術館で教育普及活動を発展させ、さまざまな教育活動の企画および運営に携わってきた寺島も、家族による教育を重視し、幼少時の家庭での教育が生涯にわたり個人の感性、生き方や価値観、信条などに影響を及ぼすものであると記している^[7]。

一方、子どもだけでなく大人も家族との関わりの中で多くを学んでいる。デューイは、子どもも成人も同様に成長しつつあるとし、両者の間の相違は、異なった条件に適した成長の様式の相違であり、共感的な好奇心や偏見のない感じやすさ、心の素直さに関しては、成人は子どものように成長し続けるべきであると考えた^[8]。また大高は、社会構成の基本単位である家族という集団における教育を家族内教育と定義し、レヒターが、大人による子どもの教育は家族内教育の一面にすぎず、家族内教育の重要な特質は長期に渡る人間関係に基づく、構成員の相互教育と自己教育で構成されると論じたことを強調している^[9]。子どもも大人を教育し、兄弟姉妹、夫婦も教育し合っており、また各人は絶えず自己を教育しているのである^[10]。

(3) ミュージアムにおける家族の交流

ファミリー・プログラムの研究は僅かであるが、博物館訪問時の家族の交流に関する研究は少なからず存する^[11]。

ディアーキングは、家族は博物館で会話をする傾向があるとしつつ、家族ごとに異なる学び方をすることを提示した^[12]。一緒に訪れた家族と個々の展示について話し交流しながら鑑賞する人々がいた一方、展示と個別に関わりながら家族とは別々に行動し、時々合流しては見たことを話し合う人々もいた。同様にエレンボーゲンは、家庭生活における科学博物館の役割を調査した際に、同じ家族でも博物館の展示物について各自が別々に学ぶことを示した^[13]。14歳の娘が家族や友達と会話をしながら鑑賞していたのに対し、他の場面では他者との交流を好む12歳の息子は、博物館ではメモを取りながら一人でじっくり鑑賞していた。

一見対照的なこれらの見方は、実はどちらも親密なくつろいだ雰囲気の中で得られる自由な精神に根差していると考えられる。関連して、子どもがしばしば、学校行事としてより家族と一緒に博物館に行く方を好むことを示す研究がある^[14]。その理由に、自分の関心のある展示物をゆっくり見られることや、見たことやしたことについてその場で家族と話せることが挙げられている。身近な存在の家族と一緒にだからこそ得られる安心感や高揚感、特有の人間関係から促される会話や行動は注目に値する。これらの研究は、美術館や博物館での家族の学びが独特なものであることを示唆している。

(4) 美術館の家族プログラムに関する研究

掲題の研究が極めて少ない中、大高は、アメリカの3箇所の美術館によるファミリー・プログラムの参加者に対し、プログラム直後に美術館で、約2週間後に参加者の自宅で、その約1ヶ月後に再び参加者の自宅で、3度にわたるインタビュー調査を行った。膨大なデータの分析と文献調査から、大高は、ファ

ミリー・プログラムは大人が自己教育や家族内教育、会話の重要性、そして子どもの芸術面に関する成長を認識するのに最適な機会であると論じた^[15]。美術館のファミリー・プログラムが大人にとっても意義深いもので、大人と子どもが相互に影響し合い、学び合える場であることを提示したことは革新的であり、たいへん示唆に富む。

3. 家族プログラム「どうびじゅつ」の概要

ここでは、西洋美術館のファミリー・プログラム「どうびじゅつ」の概要を述べる。なお、筆者が西洋美術館を選んだ理由に、家族を対象としたプログラムを長期的に行ってきた美術館であること、また、筆者が教育普及担当として5年間（2008年4月～2013年3月）勤め、ファミリー・プログラムに深く関わってきたことを挙げたい。

西洋美術館の教育普及室では、親子が一緒に参加できるプログラムの必要性が確認されたこととボランティア制度の導入で人員が確保されたことにより、2004年度、家族向けの活動として「どうびじゅつ」を開始した^[16]。「どうびじゅつ」は6歳から9歳の子ども^[17]と同伴の大人（定員15名）を対象とした、作品鑑賞と創作等の体験活動がセットになった約2時間のプログラムで、常設展の作品を家族で楽しんでもらうことを目的としている^[18]。子ども対象のプログラムでは大人は付き添いとなる傾向にあるが、「どうびじゅつ」では大人も参加者となるため、作品の鑑賞時には大人にも発言を促し、創作時は参加者全員が制作する時間としている。これは大人も一人の学び手であるという考え方に基づく。寺島は「美術をとおして豊かな想像力や情操を養うだけでなく、大人と子どもが相互に学び合うことも大切にしています」と記している^[19]。

「どうびじゅつ」は教育普及室の活動の中でも最も永続するプログラムの一つで、過去に23種類行われた。開催期は、基本的に春（3月～5月）と秋（9月～11月）の無料観覧日にあたる第2・第4土曜日で、午前と午後に各一回ずつ行われる^[20]。よって通常、同内容のプログラムが春に12回、秋に12回、別の参加者に対して実施される。企画は教育普及スタッフとボランティアの希望者が行い、幾度も打ち合わせを重ねて案を練る。これまでにボランティアが企画に参画した回は全体の約7割である。当日は基本的にボランティアが実施し、各回、3、4名が「導入」「鑑賞」「創作」を分担して進行する。教育普及スタッフ1、2名は見守り役となる。

プログラム後に再度作品を鑑賞する、また作品のことを思い出す契機とするため、近年は終了後に、その日見た作品の簡単な解説を参加者に配布している^[21]。

4. 調査方法

本研究は質的調査^[22]であり、その目的は人びとが自分の経験をいかに解釈しているのかを記述し、（結果や産物よりはむしろ）意味づけのプロセスを描くことである^[23]。また本調査は質的調査におけるケース・スタディ^[24]である。ケース・スタディの調査者のタスクは、基本的に研究で収集したデータをふるい分け、

分析し、解釈することである^[25]。ケース・スタディを含む質的調査は帰納的方法であり、データを説明できるような理論を発見しようとするものである^[26]。

(1)対象プログラム「セイビでハンズ」

本稿では、過去に行われた23種類の「どようびじゅつ」を総括的に捉えるのではなく、そのうちの「セイビでハンズ（2012年3月～5月実施）」のみに焦点を当てて掘り下げる。「セイビでハンズ」を選んだ理由を以下に記す。

1. 筆者自身がスタッフとして実際にプログラムの様子を観察した回数が多かった。
2. 大人と子どものコミュニケーションが特に図れるプログラムであった。
3. 参加者の家族構成、参加頻度等が比較的多様であった。
4. プログラム直後の大人向けアンケートに、プログラムについてさらに電話でくわしく話を聞きたい旨を記し電話番号の記入欄を設けていたため、インタビューが可能になった。

次に「セイビでハンズ」の概要を述べる。「セイビでハンズ」は2012年3月10日から5月26日までの第2・第4土曜日の10時と14時から、計6日、12回行われ、174名の大人と子どもが参加した。プログラムは以下の手順で進行された。

導入として、手の形や動きに関する簡単なゲームをロビーで行い、その後はグループ全体で常設展の4点の作品を鑑賞した。参加者は、ボランティアの問いかけにより描かれた人物の手の動きや持ち物に注目し、彫刻や絵に

表現された人物と同じポーズを取ったり、どんな場面なのか想像して話したりした。その後はワークショップ室へ移動し、石膏包帯から手型をつくる活動を行った。大人と子どもがペアになり（大多数は親と子のペア、中には祖父母と孫、子どもとスタッフのペアもあった）、まずは大人が、小さな長方形に切られた医療用の石膏包帯をぬるま湯で湿らせ、子どもの手に直接つけていく。つけ終えたらドライヤーで乾かし、固まった時点で型から手を抜いた。次は子どもが大人の手を同じ手順で型取りした（図1）。筆者の観察では、多くの子どもたちがとても丁寧に、そして慎重に、ペアになった大人の手に包帯をつけていた。最後は参加者全員の手型を並べ、皆で感想をシェアした（図2）。プログラム終了後に参加者はアンケートに答えた^[27]。

図1
石膏包帯を親の手につける子ども

図2
参加者全員で完成した手型を見せ合う場面



(2)対象者

本調査では、「セイビでハンズ」の参加者のうち、以下の条件を備えた家族を対象とした。

1. 筆者が現場にいた回に参加していた全家族
2. 2012年の事後アンケートに電話番号を記し、回答を承諾していた家族
3. 2017年に連絡が取れ、インタビューに応じた家族

筆者は1、2に当てはまる26家族に順不同で一度から数回電話をし、そのうち12家族（大人13名・子ども7名）にインタビューを行い、データを得ることができた。12家族の詳細は表1を参照されたい。

表1
電話インタビューを行った12家族（大人13名・子ども7名）

	プログラム参加者	プログラム実施日	インタビュー実施日時	インタビュー対応者	通話時間(インタビュー時間)
家族1	母親・女兒(8歳)	2012年5月26日午後	2017年1月26日午後	母親・娘(*2)	13分(7分)
家族2	母親・女兒(8歳)	2012年3月24日午前	2017年1月27日午後	母親	8分(5分)
家族3	母親・女兒(8歳)	2012年5月26日午後	2017年2月9日午後	母親・娘	25分(15分・5分)
家族4	母親・男児(6歳)	2012年4月28日午前	2017年3月4日午後	母親・息子(*2)	15分(10分)
家族5	父親・母親・男児(7歳)	2012年4月28日午後	2017年3月12日午後	父親・母親・息子	27分(5分・13分・6分)
家族6	母親・女兒(7歳)	2012年4月28日午前	2017年4月4日午前	母親・娘	15分(7分・5分)
家族7	母親・女兒(9歳)・女兒(6歳)	2012年5月26日午前	2017年4月5日午前	母親	15分(12分)
家族8	母親・女兒(9歳)	2012年5月26日午後	2017年4月9日午後	母親	19分(16分)
家族9	母親・男児(9歳)・女兒(8歳)	2012年4月14日午後	2017年4月12日午後	母親	17分(13分)
家族10	母親・男児(8歳)	2012年3月24日午後	2017年4月14日午後	母親	14分(11分)
家族11	父親・女兒(8歳)	2012年4月14日午後	2017年4月30日午後(父)・ 5月6日午後(娘)	父親・娘	18分(9分・6分)
家族12	父親・女兒(7歳)	2012年5月26日午後	2017年5月14日午後	父親・娘	25分(18分・5分)

*1 本稿では網掛けした2家族のケースを取り上げた。
*2 家族1の娘および家族4の息子はそれぞれ、筆記で回答した。
*3 「プログラム参加者」の子どもの年齢はプログラム当時のものである。

(3) 手法：電話インタビュー

本調査で用いた電話インタビューの手法^[28]は、対面式インタビューや筆記のアンケートにくらべ、回答者の労力や負担を軽減できる。なお、電話インタビューは2017年1月から5月までの平日と休日に行った。正確な情報収集につながるため回答者の発言を録音し、のちに書き起こした。回答者はほぼ全員が録音されることを承諾したが、子ども一名の回答は筆者がメモを取った。また記述による回答を希望した人からはメールや郵送などで回答を得た。よってデータは、口述（大人13名・子ども5名）と筆記（子ども2名）による回答の混在である。

インタビューの質問内容

質的調査におけるインタビューは、個々の回答者が独自の世界観を有していることを前提としているため、よりオープンエンドで、より構造化されていない形で実施される^[29]。会話はさまざまな展開になることが予想される。回答者の自然な発言につなげ、より奥行きのあるデータが得られるように、本インタビューもゆるやかなオープンエンド形式にした。よって全員に必ず問う基本的な質問は以下の5つに絞り^[30]、あとは会話を進めていく中で言葉を引き出すことにした^[31]。

〈参加者への共通質問〉

1. 国立西洋美術館のファミリー・プログラムに参加したことで、印象に残っていることを聞かせてください。
2. 美術館の展示室でご覧になった作品について、何か覚えていますか。
3. プログラムでつくった石膏の手型はその後どうしましたか^[32]。
4. プログラムや西洋美術館について意見があればおしえてください。
5. 自由時間（休みの日）に何をするのが好きですか。

(4) データの収集および分析方法、本調査の限界

創出された分析結果を確かなものにするためには、複数のデータ源あるいは複数の方法を使い、比較する必要がある^[33]。よって筆者は、A: 電話インタビュー(2017年)を中心に、B: 「どうびじゅつ」における筆者の観察(2008年～2013年)、C: プログラム直後の記述式アンケート(2012年)、D: 回答者から送られた写真(2017年)の4点を用いた。またデータ分析には、データをたえず比較分析することによりデータの中からパターンを探り出す^[34]方法である、グラウンデッド・セオリーを適用した^[35]。

筆者が回答を得られたのは26家族中12家族であり、より多くのデータが得られれば、それだけ多彩かつ顕著なパターンが見て取れた可能性は拭えない。また録音することが回答者に何らかの影響を与えた可能性もある^[36]。加えて、調査者も回答者も人間であるゆえに独特の複雑さが生じ得る。インタビューアも回答者も「その相互作用と引き出されたデータを色づける、バイアスや先有傾向、態度、物理的特徴を持ち寄るのである^[37]。」

5. 調査結果: 2家族のケース・スタディ

筆者がインタビューした12家族はいずれも親子の参加者であり、中でも母親を含むケースは10組に上った。その内、「セイビでハンズ」以後、別のプログラムにも参加した家族は3組である。本章ではインタビューのデータ分析から見出せた特徴的なパターンを有する2家族のケースを取り上げ、西洋美術館での体験が個々の家族にとり、どのような意味があったのか考察したい。

* * *

家族1のケース

電話インタビュー(固定電話)には母(Mさん)が応じ、すぐにプログラムのことを思い出した。その場に娘(Aさん)がいなかったため、後日、Aさんの筆記による回答と、インタビュー時の不明点に関するMさんの回答を郵送してくれた。2012年の「セイビでハンズ」に参加したのはMさんとAさん(当時8歳)の2名である。

〈母のケース〉

国立西洋美術館のファミリー・プログラムに参加したことで、印象に残っていることを、どんなことでもかまわないので聞かせてください。

母: うちはそのころ小学校3、4年だったのかしら、初めて参加して、こちらは所沢なんですけれど、他の参加されているお子さん達が、絵の感想を言って「どういうふう思う?」っていう、そのときに、ものすごくみなさん思ったことをすごくはきはきと発表していて、とても慣れているな、というか、感心したことをよく覚えています。うちはあんまり恥ずかしがって答えられなかったんですけれども、みなさん東京の子なのかしら、わからないんですけれども、とても、絵に対して率直に、ということがとても新鮮に感じました。

何か他にはありますか?

母: その後はあまり当たらないと言いましょうか、都内、上野の方で行われる美術館の催し物とかに募集があるので、あのときしか。あの後も応

募しているんですけれども当たらなかったの、都内のお子さんは、そういう美術に触れる機会が多くてうらやましいなあと。

それは申し訳ありませんでした。ではその後も応募くださっていたんですね。

母：そうですね、上野で行われるようなことに応募したんですけど当たなくて、あと、学校帰りにそういった、なんかありますよね、講座みたいなものがあるのかな、週末講座かしら。割りと上野という土地柄なのか、美術に触れ合う機会が多くてうらやましいなあって思ったのは覚えています。

[……]

母：それから、絵について、言われて答えるっていうようなことをしたことがなかったの、すごい新鮮だなと思ったことと、一枚一枚の絵について、くわしく、ただ好きだな嫌いだなという感覚でしか私は見たことがなかったの。娘も私も。一枚の絵について、他の人の意見を聞いて、ああこういうふうと思うんだっていうのもおもしろかったです。

初めての経験だったんですね、あのときが。他には何かありますか？

母：工作室みたいなところで作品を作ったんですよ、あのときは。そのときにそうですね、あ、こんな包帯みたいなもので作品が作れるんだなってことがわかりました。

まだ何かありますか？

母：まあだいたいこのくらいです。

美術館の展示室でご覧になった作品について、何か覚えていますか。

母：暗い絵で女の人の手のあげ方について、何か表現してあったことを覚えています。

[……]

プログラムでつくった石膏の手型はその後どうされましたか？

母：えーと、しばらく飾ってあったんですが、私の方は捨ててしまい、娘が取っておいてあります。

そうですか。飾っていたのはどこに？

母：本棚みたいなようなガラスケースがあるんですけども、そこに二つ並べて置いてあったんですけど。娘が今まで作ってきた作品、学校で作ってきた作品とかありますよね、それと一緒に並べてあったんですが。私のはもういいやと思って捨ててしまいました。

どれくらいの期間飾られていたんですか？

母：えと、今も飾ってありますので。

母：もう一回見てみますけれど。捨てはしていないと……。

もしもし、あ～残念、見当たらないです。もしあったらメールしますけれども。

娘さんに聞いていただけるとありがたいです。

母：わかりました、はい。

お母様のと両方飾っていたときは、えーと確か握手できるような形で……

母：そうですね、重なるような形で。

そのように飾っていたんですか？ それとも2体並べて……

母：2体並べて、私の大きい方の手に娘の手がちよこんと乗るような形で向き合っていたと思います。

〈娘のケース〉

国立西洋美術館のファミリー・プログラム（石こう包帯で手型をつくった回）に参加したことで、心に残っていることや覚えていることをおしえてください。

娘：じぶんの“手”の型を作って、その作品を見るとじぶんの手なので不思議にも感じたし、嬉しかった。

プログラムで見た美術作品について、何か覚えていることはありますか？

娘：覚えていません。

そのときにつくった手型はどうしましたか？

娘：飾ってあった。

プログラムや西洋美術館のことで、ほかに感想などあればおしえてください。

娘：何度か行ったことがあるので、世界文化遺産に登録された時は嬉しかったです。

家族1の概要

母の印象に強く残っていたのは、他の子どもたちが作品の感想を「はきはき発表して」いたことへの驚き、作品に関して何か聞かれて答えるという鑑賞体験が初めてで「新鮮」に感じたこと、関連して他者の考えを知ることのおもしろさであった。母には、子どもの教育という観点から「都内の」子ども、また上野という土地は美術に触れる機会が多くてうらやましいとの思いが強くあった。家族は自宅に、母の「大きい方の手に娘の手がちよこんと乗るような形」で、親子の手型を向き合うようにして並べて飾っていた。母はインタビュー中、娘の手型はまだ飾ってあると思い込んでいたが、実際にはなく、後日、母の手型は2013年3月まで、娘の手型は小学校卒業の2016年3月ごろまで、娘がピアノを弾くための「ピアノの部屋」に飾っていたことを手紙と電話で知らせてくれた。娘は手型のことを記憶しており、作品と自分との関係を不思議に感じていた。親子は鑑賞した作品についてはほとんど覚えていなかった。

* * *

家族10のケース

電話インタビュー（固定電話）には母（Kさん）が応じ、すぐにプログラムのことを思い出した。回答者はKさんのみである。2012年の「セイビでハンズ」に参加したのはKさんと息子のT君（当時8歳）の2名だった。

国立西洋美術館のファミリー・プログラムに参加したことで、印象に残っていることを、どんなことでもかまわないので聞かせてください。

母：え～参加したのが、あの、このプログラムは……、あの～、なんていうんですかね。怪我したときに、手足を固定するギブス……、石膏のような、紙粘土のような。それでこう、手を包んで、その抜いたものが、そういうあの、なんか芸術っぽくなるみたいになつくりだったんですけど。すごくそれがなんか斬新で、その発想がですね。あの、包帯のようにぐるぐる巻いて、上手に抜くという。それがだからすごく、あの……、身近な素材を使って、そういうものを、あの、イメージしてつくるっていうのが残りました。

よくご記憶ですね。

母：記憶っていうか、すごい記憶に残ってる。

[……]

そのときにですね、あの、館内でみなさんと一緒に見たと思うんですけど、

母：いっぱいありましたね、はい。

そのときのことで、何か覚えていることはありますか？

母：これは私でいいんですか？

はい。

母：あの～、すごくあの、空間を利用して、その確か地下……、と1階で
したっけね、なんかあの、え～と、絵もまあ、見ましたけれども、彫像、な
んていうんですか、ブロンズの、なんか大きなね。そんなものがすごく印
象に残っていますね。

[……]

その後何か、それに関連するようなことって、ご自宅でされました？

母：いえ、実はしていません、そこまでは。

そうですか。

母：はい。

ありがとうございます。

母：いいえ。でもしばらく飾っていました。

そうなんですね。

母：はい。

えーと、その飾っていたのは、あの、お家のどこでしょうか？

母：はい？

お家の中のどのお部屋でしょうか？

母：飾ったのですか？ あの、リビングに飾っていました。

それはあの、どのように飾っていたかご記憶ですか？

母：えっと確か、その、えーとそのまま置いて、ま、ちょっと立ててたん
ですかね。ちょっとそのへんが、直立していたか、よく、ちょっと記憶にない
んですけども。

それは、お二人の物を並べて、ですか？

母：はい。

家族10の概要

母の印象に最も強く残っていたのは、石膏包帯で手の型を取る活動につい
てであり、その記憶は鮮明かつ詳細だった。一方、鑑賞した作品の記憶は
あいまいだった。家族は、持ち帰った二人の手型を自宅のリビングに一時期
飾っていた。しかし母によると、手型が崩れ始めたため処分した、あるいは
引越しの際に別の場所に移したそうで、現在では手元に残っていなかった。「セ
イビでハンズ」のプログラム参加がこの家族にとって初めての西洋美術館訪
問だったことも、会話から判明した。「敷居が高い」「年齢層の高い」イメー
ジも相まって、当日は少し緊張していたが、実際に来てみて「子どもが行って、
楽しかった」と思うと話し、後日、息子の同級生の母親に「おもしろかったよ」
と話したことも語った。

6. データの分析および「どうびじゅつ」の意義をめぐる考察

本章では、調査で得られたデータから浮かび上がった顕著なパターンを提示し、分析することにより、西洋美術館のファミリー・プログラムが、前章で紹介した家族の心にいかなる経験として残っているのかを探りたい。

(1) 大人も子どもも特に創作部分を記憶していた

顕著なパターンの一つは、インタビューに応じた家族が創作活動をよく覚えていたことである。前章で見たように、家族10の母Kさんの記憶に最も残っていたのは石膏包帯で手の型を取ったことだった。Kさんは素材や制作プロセスのみならず、石膏包帯で手型を取るという発想の斬新さに驚いたことまで記憶していた。なお、Kさんはプログラム直後のアンケート「プログラムを通して個人的に発見したことや学んだことはありますか」との質問に、「今回使用した医療用の石膏包帯はとても扱いやすく、自宅でも購入して遊びたいです」と記している。実際は行わなかったそうだが、創作部分がKさんの印象に残っていた理由の一つに、それが心と頭、そして手を使う活動であったことが挙げられないか。創造的なプロセス——驚きや歯がゆさを感じながら材料と格闘し、アイデアが形になり変化していく過程——への関与は[……]人を意思決定のモードへと引きずり、「さわる」という触覚による探求は、幅広い学びのスタイルに連動していく^[38]。美術の創作活動は、感じ、考え、決定していくプロセスであるともいえる。筆者はプログラム中に大人の参加者が創作に没頭する姿を幾度となく目にしたが、ある活動に没入しているときは、これまで自覚していなかった自身の潜在能力や技能に気づく機会でもある^[39]。Kさんは、身近な素材を使って創造的な「作品」を自分でつくれたことに、感動したのではないだろうか。

Kさんは、息子のT君のものと並べて置かれた形で、二人の手型を家のリビングにしばらく飾っていたと話した。家族が集うリビングに二人の作品を並べていたこととKさんの記憶に創作部分が強く刻まれたことに、相関関係はないだろうか。家庭におけるモノは、それがたびたび象徴的に扱われることにより、社会的ネットワークの中で個人をその人たらしめている関係に永続性を与え、この意味において個人と別の個人をつなぐ役割がある^[40]。家族1の娘Aさんが、幼いころの自身の手型と現在の自分との関係を見つめ、不思議に感じたことにも注目したい。モノは、少なくともその人の「力」、「延長線上にある何か」、「社会的なつながり」を明らかにし、主にこの3つの側面から自己を客観視させる^[41]。自己や家族と関わりの深い手型作品は、家に飾られることによって象徴性を帯び、KさんとAさんに自己や家族についての認識を促すきっかけの一つになったとは言えないか。

Kさん同様に多くの大人(8名)と子ども(6名)が作品制作のことを記憶していた。「すごく冷たくて、ベタベタしたのを覚えています(家族12の娘)」「生温かかった(家族11の父)」といった感触に関するもの、Kさんの例のように素材や制作プロセスに関するもの、さらには、帰宅後に夫や息子(娘の兄)に手型を見せて家族皆で話した会話(家族3の母)に関するもの等、記憶は多岐にわたっていた。6名の子どものうち5名の記憶が感触や感覚に関

するものだったことも示唆に富む。

一時期でも手型を自宅に飾っていた家族ほど創作部分を記憶していたという事実は特筆に値する。12家族のうち8家族が、およそ1ヶ月から5年の間のある期間、持ち帰った手型を自宅に飾っていた。場所はリビング(3組)、玄関(2組)、寝室(1組)、その他(「ピアノの部屋」)(1組)、不明(1組)である。一方、手型を飾らなかった2家族が創作についてほとんど覚えていなかったことは興味深い。家族7の母は「手をつくったっていう記憶がなくて」と話し、家族12の父は「最終的にどうなるんでしたっけ? その包帯は……」と尋ねた。家族9の母は、次のプログラム「アートでノリノリ♪」^[42]の制作物に娘がアレンジを加えた作品が今も子ども部屋に飾られていると話し、写真を送ってくれた(図3)。母は特にこのプログラムのことをよく覚えていた。

これらの結果は、プログラムに創作活動を取り入れる重要性、そして自宅に作品を飾ることが記憶につながる可能性を示唆している。



図3
家族9の子どもが自身の部屋に飾っている作品

(2) 大人も子どもも鑑賞作品の記憶は薄く、大人はトークの手法を記憶していた

他方、家族1、家族10のケースにも見られたように、大人も子どもも、鑑賞した美術作品についてはほとんど記憶していなかった^[43]。発言も「大きな絵の前で説明をもらった(家族2の母)」「きれいな絵とか、大きい絵だなとかは思いました(家族6の娘)」等、抽象度の高いもので、コメントがない場合も少なからずあった。

しかしながら、家族1の母のケースのように、過半数の大人が鑑賞の手法に対する印象を覚えていた。家族8の母は「割りとかう、双方向な感じでしたよね。その、レクチャーもどう思う? って聞いてくださって、子どもたちがこうこうこういう風に言うと、あ、じゃこうだよって。やりとりっていうんですか、あれがすごく丁寧で、子どもも取り組めたんじゃないかな」と話している。西洋美術館のスクール・ギャラリートークでは「子どもたちの思考を刺激し、観察力を育て、自ら考えて言葉を紡ぐことを促す、対話式のトーク^[44]」を行っており、この考え方はファミリー・プログラムにも適用されている。西洋美術館の方針や手法は、参加者にどのように影響したのだろうか。

家族1の母Mさんにとり「絵について、言われて答える」また「他の人の意見を聞く」鑑賞は初めての経験で、新鮮に映った。他者との対話を通した鑑賞は人々の能動性や思考を促す。ハウゼンとヤノウインは、対話を介した鑑賞方法VTS (Visual Thinking Strategies) において重要なのは、自分で考えることであり、注意深く見て、見えるものについて考えるプロセス、そして見えるものを読み解いていけるようになることだと話す^[45]。プログラム中の対話は、主にファシリテーターとなるボランティアと参加者の間で行われる。M

さんは問われることにより、自身でいろいろ考えたのではないか。

また、Mさんは他の子どもたちの活発な発言に驚き、他者の感じ方に触れるおもしろさを知った。対話による鑑賞は、多様な感性や考え方に触れ、さまざまな解釈を他者と共有する機会である。ハインは、一人ひとりの来館者は、展示に対してそれぞれ固有の経験、知識、そして自身が好む学びのスタイルを持ち寄るとし、個別の来館者と豊かな資源である展示との相互作用は、各人に個別の成果を授け、さらにその経験を他者と共有することにより、グループ内の人々の経験をも豊かにすると論じている^[46]。社会的な交流は、学び手にとっての個人的経験ということを超えて、その人の知識や学習能力さえも拡張していく^[47]。Mさんは、美術作品を媒介した双方向のコミュニケーションを通じて、美術作品は自由に見てよいこと、また人の解釈は多様であり、ゆえにおもしろいということを発見したのではないか。

(3) 大人は「どうびじゅつ」を子ども向けと認識していた

先述したように、西洋美術館では大人にもプログラムを提供してきた。しかしインタビューでは、大人個人に向けた質問に対して、総じて（自身の）子どもに関する回答が多かった。このことも主要なパターンの一つであり、データからは、子どもの教育に対する熱心さと相まって、大人による「家族プログラム＝子どもプログラム」との認識が浮き彫りになった。家族1の母Mさんは、自身の娘が「恥ずかしがって答えられなかった」のに対し他の子どもたちは活発に発言していたことに感心したこと、上野は美術館のプログラムも多く、都内の子どもは美術に触れる機会が多くてうらやましいと感じたことを強く記憶していた。これらは子どもの教育という観点から語られ、Mさんの教育への熱意が伝わる。Mさんはトークの手法は記憶していたが、作品自体についてはほとんど覚えていなかった。その一因に、Mさんがファミリー・プログラムを子ども向けと捉えていたことが考えられないか。同様に、13名中9名の大人から子どもに関する発言が少なからず出た。「子どもにこう、美術を見せたいのと触らせたいのということで、参加はしたんですね（家族11の父）」等である。さらに、「自由時間（休みの日）に何をするのが好きですか」という問いが自分ではなく子どもに向けられたものだったと思った人は、13名中10名にも上った。

現代の家族は、その多様な活動のうちでも、子育てを最も重視する小集団であり、そのさまざまな行事も、その大半が子どもを中心に据えて企画され、実施されている^[48]。岩永は、子どもの社会的人間としての成長にとって、家族、特に親の期待を最も基本的で重要なものとし、また現代社会における実質的なオピニオン・リーダーとしてメディアの存在を重要視している^[49]。教授する側と学習する側が明確に分かれている学校教育の影響^[50]も勘案すると、こうした現代社会で大人が自らを学び手であること、さらに子どもと相互に学び合えることを自覚するのは難しいのが実情かもしれない。Mさんも、自分自身より娘の成長や学びの方に意識が向いていたといえそうだ。

興味深いことに、アメリカの美術館によるファミリー・プログラム参加者の追跡調査を行った大高の研究にも類似した現象が見られた。調査によると、大人の参加者は概して子どもの教育に熱心だった。大高は、頻繁に子どもの

教育の機会を探そうとし、子どもや孫の成長という観点からそれらの教育プログラムの効果を絶えず評価している大人の態度を「子ども向け教育プログラムの鑑定」と定義づけている^[51]。この共通の現象は、ファミリー・プログラムに参加する親が抱く子どもの教育に対する熱意が、国を異にしても基本的に変わらない可能性を示している。しかし、大人の鑑賞作品に関する記憶が薄いことに鑑みても、もし大人が自身の学びよりプログラムの鑑定、つまり子どもの教育という観点によるプログラムの評価を重視し、「どうびじゅつ」を子ども対象と認識した状態で参加しているならば、大人自身が思考し何かを学ぶ機会を失ってしまうのではないだろうか。

筆者は、「どうびじゅつ」に長く携わる中、自分の親が人前で発言する姿を実にうれしそうに見ている子どもの姿をたくさん見てきた。いつもは自分に「教える」立場の親が、自分と同じように「参加」して何かを「学んで」いる姿を見るのは、子どもにとっても気恥ずかしさを上回ってうれしいことなのではないだろうか。対等な立場で大人が学んでいる姿は、おそらく大人のみならず子どもにも影響を及ぼすだろう。

7. 結論

(1) ファミリー・プログラム「どうびじゅつ」の意義とは

5年という年月にもかかわらず、電話に出た12名のうち11名が「どうびじゅつ」や「セイビでハンズ」のことを即座に思い出し、ほぼ全員が電話での回答や録音を承諾してくれた。中には当時を懐かしがり、筆者に感謝の言葉を述べた人も少なからずいた^[52]。程度の差こそあれ、ファミリー・プログラムが、好ましい記憶として回答者のなかに残っていると筆者が感じたことをまず述べたい。

本研究では、多くの家族に共通するパターンを探り、2家族のインタビュー内容を中心に分析した。そこから人々の大半が創作部分を覚えていたこと、作品自体より対話を通した鑑賞方法が大人の心に訴えたこと、そして大人がファミリー・プログラムを子ども向けと認識していたこと等がわかり、それらが持つ意味や示唆するところを考察してきた。

家族にはたいいてい、家族だけに通じる共通の思い出や話題がある。大高は、教育において物語 (stories) が重要な役割を果たすとし、その理由を、物語は作り手と聞き手の両者にとって体験を記憶可能な形に変容させるからであるとしている^[53]。調査を終えた今、大人と子どもが体験を共有することを重視する「どうびじゅつ」は、家族の物語に寄与することができるのではないかと筆者は考える。フォークとディアーキングは、家族の会話というのは親密かつ個人的なものになる傾向があること、また、博物館で行われた会話の多くが、家に帰ってから家族の間で続けられることを示す研究に言及している^[54]。もしそうであるなら、「どうびじゅつ」が大人にとっても意義深いものであることを今まで以上に参加者に認識してもらい、家族の長期的な交流へと発展させていくことが肝要ではないか。美術館での体験が、参加した家族一人ひとりにとって喜びや学びの場となり、さらには持ち帰ったモノが家族の共通の思い出を深め、家族をつなぐ物語の一つとなるなら、それこそ西洋美術館におけるファミリー・プログラムの意義ではないだろうか。

(2)「どうびじゅつ」への提言

最後に、「どうびじゅつ」が家族の共通の思い出、そして家族の物語の一つとなることに今まで以上に資するべく、西洋美術館では具体的に何ができるのか、3点提案したい。

①プログラム中に家族の会話の機会を創出する

回答者の中には、親子で交わした会話や、家族の他のメンバーとの帰宅後の会話を覚えていた人が少なからずいた。大高は、会話は対等な関係を生み出すとし、その始まりにおいては誰もその結末がわからないため、特定の話題に対して人々が平等にその過程に参加できる、オープンで協力的な冒険であると述べている^[55]。そして子どもとの会話の仕方を学ぶことが大人の教育観のパラダイム・シフトになり、「大人が子どもに教える」から「大人も子どもと共に学ぶ」という考え方につながると論じている^[56]。参加者の大半が展示室で鑑賞した作品についてほとんど覚えていなかったこと、また大人が程度の差こそあれファミリー・プログラムを子ども向けと解釈していたことに対して、「どうびじゅつ」では、会話を通して大人と子どもが共に学び合えるよう、たとえば作品鑑賞時には、従来のボランティア対参加者の方向性に加え、家族だけで展示室の作品について話し合う時間を設けてはどうか。より親密かつリラックスした雰囲気の中で、家族が自由に会話を行い、その後、話された内容を全体でシェアしてみてもはどうだろうか。

②プログラム後の家族の絆を強める

本調査により、家にモノを飾ることと記憶の相関関係が示唆され、それが家族に関するモノである場合、家族の「物語」につながっていく可能性が示された。たとえば、プログラムで鑑賞した作品の絵葉書や図版を、家に飾れる記念品として、最後に参加者に手渡してはどうか。制作物を家に飾った人々の中で、家族が集う場であるリビングに飾った家族が一番多かったことに注目したい。また家族6は、家のリビングに西洋美術館の所蔵作品のポスターを飾っており、それが親子をつなぐ役目を果たしていた。家に飾られた絵葉書や図版は、鑑賞作品に関する記憶の保持を促すと同時に、家族の新たな会話を生み出す可能性も内包しており、プログラム体験という家族の思い出を強める=家族の物語に寄与する触媒となるのではないだろうか。

③広報を含め、プログラムの趣旨を周知する

大人の家族プログラムに対する固定観念を解きほぐすにあたり、プログラムの趣旨を周知し、「どうびじゅつ」が大人にとっても意義深いことを言葉で伝えていくことも必要ではないか。方法としては、ウェブサイトに掲載する、事前の連絡時に参加者に伝える、プログラム開始前に告知する等がある。それにより大人に心構えができ、「どうびじゅつ」の背後にある意味を大人が知る契機となるかもしれない。

〔謝辞〕

貴重なデータを快くお貸しいただくとともに温かな励ましを賜りました寺島洋子国立西洋美術館主任研究員に、心よりお礼申し上げます。本研究は、寺島氏の惜しみない支援と協力なしには実現しませんでした。また本稿執筆にあたり、幾度となく貴重なご指摘、ご助言を賜りました大高幸放送大学客員准教授、酒井敦子国立西洋美術館特定研究員に深くお礼申し上げます。最後に、筆者のインタビューに快く応じてくださった過去のプログラム参加者の皆様および本稿執筆にさまざまなあたちでご協力くださった皆様に感謝申し上げます。

- [1] Miyuki Otaka, *A Case Study of Family Art Programs Focusing on Participants' Post-Program Activities* (Doctoral Dissertation, Teachers College, Columbia University). UMI, 2007; Miyuki Otaka, "Museum family programmes as a model to develop democratic education: A pedagogy inspired by the principles of *Cha-no-yu*", *International Journal of Education Through Art*. Volume 12, Number 1, 2016, pp.39-56.
- [2] John H. Falk & Lynn D. Dierking, *The Museum Experience*, Left Coast Press, 1992, p.XV.
- [3] John H. Falk & Lynn D. Dierking, "Recalling Museum Experience", *Journal of Museum Education*, Volume 20, Issue 2, 1995, pp.10-13; David Anderson "Visitor's Long-Term Memories of World Expositions", *Curator the Museum Journal*, Volume 46, Issue 4, 2003, pp.401-420; 清水寛之・湯浅万紀子・デイヴィッド・アンダーソン「社会文化歴史系博物館における来館者の長期記憶と懐かしさ反応に関する調査研究の意義」日本ミュージアム・マネージメント学会研究紀要第18号、2014年、19-25頁。
- [4] みのかも文化の森／美濃加茂市民ミュージアム「～平成28年度の活用に向けて～ みのかも文化の森／美濃加茂市民ミュージアム 活用の手引き・活用実践集 平成27年度版」、みのかも文化の森／美濃加茂市民ミュージアム、2016年、136-140頁。
- [5] Hope Jensen Leichter, *The Family As Educator*, Teachers College Press, 1974, p.1.
- [6] W.O. レスター・スミス、岩波新書『教育入門』周郷博訳、第13版、岩波書店、1969年、104-105頁。
- [7] 国立西洋美術館『国立西洋美術館 教育活動の記録 1959-2012』、国立西洋美術館、2015年、12頁。
- [8] ジョン・デュエイ『民主主義と教育（上）』松野安男訳、第31版、岩波書店、2014年、88頁。
- [9] 大高幸「家族のためのミュージアム・リテラシーとは：ニューヨーク市内3美術館の家族プログラムと参加家族の日常生活の研究から」日本ミュージアム・マネージメント学会研究紀要第14号、2010年、20頁。
- [10] 寺島洋子・大高幸『博物館教育論』、財団法人放送大学教育振興会、2012年、149頁。
- [11] Minda Borun, Margaret B. Chambers, Jennifer Dritsas & Julie Johnson, "Enhancing Family Learning Through Exhibits", *Curator the Museum Journal*, Volume 40, Issue 4, 1997, pp.279-295; Judy Diamond, "The Behavior of Family Groups in Science Museum", *Curator the Museum Journal*, Volume 29, Issue 2, 1986, pp.139-154; Kirsten M. Ellenbogen, "Museums in Family Life: An Ethnographic Case Study", *Learning Conversations in Museums*, Lawrence Erlbaum Associates, 2002, pp.81-101.
- [12] Lynn D. Dierking, Jessica J. Luke, Kathryn A. Foat, & Leslie Adelman, "Family & Free-Choice Learning", *Museum News*, 2001, pp.38-44.
- [13] Ellenbogen, *op. cit.* (n.11), p.93.
- [14] Nina Jensen, "Children's Perceptions of Their Museum Environments: A Contextual Perspective", *Children's Environments*, Volume 11, no.4, 1994, pp.300-324.
- [15] Otaka, *op. cit.* (n.1), p.276.
- [16] 国立西洋美術館、前掲書（註7）、12頁。
- [17] 開始当初は6歳から10歳としていたが、子どもの発達段階を再考し、2011年度より年齢設定を変更した。
- [18] 国立西洋美術館『国立西洋美術館ボランティア活動報告2008年度-2012年度』、国立西洋美術館、2013年、17頁。
- [19] 寺島洋子「ファミリープログラム 家庭と美術館における学びの連携」、『ZEPHYROS：国立西洋美術館ニュース』、国立西洋美術館、No.66、4頁。
- [20] 2016年度より、第1・第3土曜日の実施に変更した。
- [21] 国立西洋美術館、前掲書（註7）、76頁。アンケートで作品解説を求める声が挙がり、プログラム後に簡単な作品解説を配布するようになった。
- [22] シャラン・メリアム&エドウィン・シンブソン『調査研法ガイドブック 教育における調査のデザインと実施・報告』堀薫夫訳、ミネルヴァ書房、2010年、115頁。著者は、質的調査は人々によって構築される日常世界を理解すること、そして調査者が他者の解釈を解釈することであると述べている。
- [23] シャラン・メリアム『質的調査入門 教育における調査法とケース・スタディ』堀薫夫・久保真人・成島美弥訳、ミネルヴァ書房、2004年、110-111頁。
- [24] メリアム&シンブソン、前掲書（註22）、124頁。著者は、ケース・スタディとは「ある現象あるいは、個人、集団、制度、地域社会といった社会的単位、集約的な記述と分析であり、それは、個々のデータをとおして最も特徴的なパターンを探すプロセス」であるとしている。
- [25] メリアム&シンブソン、前掲書（註22）、126頁。
- [26] メリアム、前掲書（註23）、11頁。
- [27] なお、「セイビでハンス」は主任研究員の寺島による企画である。
- [28] メリアム、前掲書（註23）、105頁。著者は「インタビューは質的データを収集する一般的な方法の一つであり、行動や感情、あるいは人びとがまわりの世界をどう解釈しているのかなどが観察できないとき、また再現が不可能な過去の出来事に興味を抱いたときに必要となる」と述べている。
- [29] メリアム、前掲書（註23）、107頁。
- [30] なお、対象者の年齢や参加頻度等に応じて問い方や言い回しを多少変えた。
- [31] 回答に影響を及ぼさない範囲で、初めにインフォームド・コンセントを行った。
- [32] 質問②や③に関連した制作物があれば写真を撮り送ってもらうよう回答者に依頼した。
- [33] メリアム&シンブソン、前掲書（註22）、116頁。
- [34] メリアム、前掲書（註23）、25頁。

- [35] 木下康仁『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 質的研究への誘い』、弘文堂、2003年、25頁。著者はグラウンデッド・セオリーを「データに密着した分析から独自の説明概念をつくって、それらによって統合的に構成された理論である」と定義している。
- [36] メリアム&シンプソン、前掲書（註22）、127頁。
- [37] メリアム、前掲書（註23）、126頁。
- [38] Hollie Ecker & Sarah Mostow, “How might you...? Seeking Inquiry in the Museum Studio” *Journal of Museum Education*, Volume 40, Number 2, 2015, p.208.
- [39] Mihaly Csikszentmihalyi & Kim Hermanson, “Intrinsic Motivation in Museums: Why Does One Want to Learn?” In J. H. Falk & L. D. Dierking (Eds.), *Public Institutions for Personal Learning*. Washington, DC: American Association of Museums, 1995, p.73.
- [40] Mihaly Csikszentmihalyi, “Why We Need Things”, *History from Things: Essays on Material Culture*, Smithsonian Institution Press, 1993, p.21.
- [41] Csikszentmihalyi, *op. cit.* (n.40), p.23.
- [42] さまざまな線や形、色で表現された絵を見た後、コラージュにより立体的な肖像画を制作したプログラム。
- [43] 但し例外的に、1名の大人が鑑賞作品の一枚を鮮明に記憶していた。彼女はプログラム体験を全般的に記憶しており、美術への興味が強いこともインタビューからうかがえた。
- [44] 国立西洋美術館ウェブサイトによる。www.nmwa.go.jp/jp/education/index.html（2017年12月10日閲覧）。
- [45] アビゲイル・ハウゼン&フィリップ・ヤノウィン「視覚による思考を育てる戦略 (Visual Thinking Strategies) 1年目のレッスン」、Visual Understanding in Education, 1998, p.6.
- [46] George E. Hein, *Learning in the Museum*, Routledge, 1998, p.172.
- [47] Hein, *op. cit.* (n.46), p.174.
- [48] 岩永雅也『教育と社会』、放送大学教育振興会、2011年、57頁。
- [49] 岩永雅也、前掲書（註48）、71頁。
- [50] Otaka, *op. cit.* (n.1), p.268.
- [51] Otaka, *op. cit.* (n.1), p.249.
- [52] 現在もプログラムが継続していることに驚いた人、インタビューを契機に再び上野に行った家族もいた。
- [53] 大高、前掲論文（註9）、20頁。
- [54] John H. Falk & Lynn D. Dierking, *Learning from Museums*, Altamira Press-A Division of Rowman & Littlefield Publishers, Inc., 2000, p.94.
- [55] Otaka, *op. cit.* (n.1), p.266.
- [56] Otaka, *op. cit.* (n.1), p.269.

Today, art museums both in Japan and overseas hold programs aimed at families, but very little research has been done on this topic. And only rarely have follow-up surveys been held with program participants at a set period after their visit to the museum. Given this, the author conducted interviews with participants of the family program called Doyo Bijutsu (Saturday Art Workshops) held at the National Museum of Western Art (NMWA) from March to May 2012 in order to find out about how participation was later utilized. Telephone interviews were conducted in 2017, five years after the program participation, with responses received from 12 families, specifically 13 adults and 7 children.

This research explores what the art museum program experience meant for the family and considers how the art museum can contribute to family learning experiences. As case studies in a qualitative survey, I did a multifaceted analysis considering two families, using as my data the observations of families who participated in relevant family programs, immediate post program participant surveys, and the photographs sent by the respondents, in addition to the central telephone interview.

Many of the participants remembered the creative section and those who displayed the products made in workshops in their homes had stronger memories. While it seems that the families' memories of the observed artworks had lessened, the majority of the adults remembered the two-way communication with the instructor and the artwork appreciation methods that were used to encourage the children to think about the artworks. Further, the adult-participants seemed to hold the fixed belief that these family programs were really aimed at the child-participants, in spite of the program's design involving the active participation of all age participants.

Since the family is the most fundamental social group in society, the learning that goes on as a family continues forever. In this article I consider that family conversations and display of items related to the program are important, and ponder what the NMWA can do in the future to assist family program participants to use their shared memories of the program to continuously develop their own narrative that strengthens family bonds.